

義仲進撃（大野恵造）

源氏の白旗 北庭に 翻る

是や 旭将軍 義仲が 勢

山路 隘き 処に 平軍を 邀う

計あり 暮夜 火牛を 放つ

敗走の 兵馬 概ね 顛落

俱利伽羅の 谷 為に 浅し

援軍 来れども 恐れて 近きに 寄らず

洛への 進撃は 破竹の 如し

源氏白旗翻北庭 是旭将軍義仲勢
山路隘処邀平軍 有計暮夜放火牛
败走兵馬概顛落 俱利伽羅谷為浅
援軍來恐不寄近 指洛進撃如破竹

解説 信濃で兵を挙げた木曾義仲は越前に出て同族を集めた。その数五万。七万余騎の平軍はこれを撃滅しようとして加賀、越中の境にある礪竝山へ向ったが、その大部分は「俱利伽羅落し」の憂目に遭って全滅した事を詠った詩。

語釈 ※北庭 旭将軍 木曾の源義仲のこと。 ※隘 せまい。 ※暮夜 夜にはいったとき。 また夜。 ※火牛 兵法の一つ。 牛の角に兵刃を束ね、尾に葦を結び付けて点火し、夜陰に乗じて敵陣に放つもの。 ※顛落 ころがって下へ落ちる

※俱利伽羅谷 富山県小矢部市、俱利伽羅峠の南斜面にある深い谷。 ※破竹 破竹の快進撃。

通釈 源義仲の率いる軍の白旗が風に舞って翻っている。 この軍の大將は源義仲である。 俱利伽羅峠の道は狭く、そこに平家軍が攻め寄ってきた。 義仲軍には計画があり、夜を迎えて義仲は平家軍に向けて火牛を放った。 突然の火牛の襲来で平家軍は混乱し、俱利伽羅谷へと顛落する。 平家軍の援軍は恐れて近づこうともせず、ただ見守るばかりであった。 この後、義仲軍の侵攻は破竹の如く、洛に進撃を開始した。